



## 一期一会 忘れ得ぬ時間①

「みなみせんじゅまいたうん」から「すまいるたうん」へ」

1999年2月、地域の情報を伝えたいとの思いから「みなみせんじゅまいたうん」を発刊しました。2006年6月に「すまいるたうん」と名を変えて再スタートしました。

一期一会 心の語録」も12回となり、すてきな方との出会いは風景写真のように私の記憶のアルバムに重ねられています。その「すまいるたうん」のアルバムから感銘を受けた方々の掲載記事を抜粋し、ご紹介致します。

◇「今が青春！障がいと共生する 小竹愛子さん」(平成20年7月 第77号)

「33歳から人生が変わりました」

6人姉妹の四女として生まれた小竹愛子さん(南千住在住)は、71歳(昭和12年)脳性まひによる四肢体幹機能障害(身体障害者手帳1級)です。

「訓練で、伝い歩きまでできたのですが」

戦争が始まり、疎開中はリハビリができませんでした。今、自由に動くのは、左足のかかとだけです。愛子さんは学校に通った経験はありません。1979年(昭和54年)に養護学校が義務教育になるまで、本人および保護者の意思に関わらず、重度障害者の方の多くが就学猶予や就学免除の適用をされていました。このために愛子さんはずっと、家にこもっておりまし。

愛子さんに光をもたらしたのは、お姉さん

のご主人の障害者手帳を申請しようとの働きかけでした。

「恥ずかしいことはないのよ(愛子さんに障害があることが)」

障がいのある人に対する偏見や差別が厳しい時代でした。お姉さんは6人姉妹なのに、愛子さんのことが聞かれるのが嫌で5人姉妹と言っていたこともあったそうです。お姉さんのことばに家族が変わりました。

「何かできることがある。生きがいを作ろう」

障害者手帳を取りに行ったのが転機となり、愛子さんは、荒川区障害者センター(現たんぽぽセンター)に通い、機能訓練をはじめました。障害者センターの理学療法士や作業療法士の熱意と愛子さんのやる気で左足の指が動く頃は、足の指を使って一針一針刺繍もしました。荒川区の女性ではじめて、電動車いすを使用したのも愛子さんです。左足で操作出来るもので、荒川たんぽぽセンターで操作方法を1年半程かけて学びました。

「趣味はパソコンと音楽を聴くこと」

12、13年前から、毎週木曜日にアクロスあらかわで、足を使ったパソコンの操作を学んでいます。左足に補助具を付けて、パソコンを打ち、メールも60人位の方とやり取りが出来るようになりました。パソコンの操作を覚える過程で、字を覚えられました。

「沢山の人の助けられて」

起きる・寝る・食事・排泄・愛子さんの日常生活は全介助。ヘルパーさん・ボランティアさん・他たくさんの人に支えられて一日24時間を過ごしています。身体に大きなハンディをかかえながら、まだ自分にはできることが

あるのではないかと愛子さんは前向きです。たくさんのお友だちとの出会いは、元気の源になっております。

「無理をすると愚痴が出るから」

姉妹の中で手伝える方が、無理なく愛子さんの介助をされています。姉妹が協力して愛子さんの誕生日に合わせて旅行に出かけたりしており、今年には三越劇場で観劇も致しました。

「今が青春」

笑顔で話される愛子さんは、飛行機や船に乗りたいたいとやりたいことが一杯です。「外に出ましよう。お友達を作りましよう。あなたの出番は必ずあるはずですよ。」

障がいを受け入れられずに家に閉じこもりがち人達に愛子さんは呼びかけています。「生まれた時から障害があることに慣れているから、後から障害を持った人より強いかもしれない」以前に脳性まひの方が、言われたことを思い出しました。

踏み出したからこそ開けた道。そこには想像絶する努力があったことと思います。障害を受け止めて、明るく前向きに毎日を大切に生きている愛子さんの笑顔は本当に素敵でした。

この記事掲載後に麻痺が進み、片側しか顔が向けられなくなっても、周りの方のご尽力で寝たきり状態のままコンサートに出かけ楽しむことができました。

すまいるたうんの記事はNPO法人粹と縁のHP情報図書館に掲載されています。

<http://www.iki-toen.com/library/smitown>